

平成二十八年 度

清風南海中学校入学試験問題（A入試）

国語（六〇分）

注意

- ① 解答用紙に受験番号、名前を記入しなさい。
- ② この表紙には受験番号のみを記入しなさい。
- ③ 答えはすべて、解答用紙に記入しなさい。
- ④ 字数を数える場合、ことわりのない限り、句読点や符号なども一字として数えなさい。
- ⑤ 選択問題はすべて記号で答えなさい。
- ⑥ 解答用紙、問題用紙の両方とも提出しなさい。

受験番号

次の文章は能楽師の書いたものである。これを読んで後の問いに答えなさい。

「膝^{ひざ}ってどこ？」と尋ねると「ここに決まってるだろう」と膝頭^{ひざがしら}を指します。「じゃあ、肩^{かた}は」というと「何^{なん}いってるの、ここでしょ」と肩峰^{けんぽう}を指す。現代人にとっては、これが当たり前の感覚です。しかし「子どもを膝に乗せる」というときに、膝頭に子どもを乗せる人はいないし、「肩が凝^こる」というときに肩峰が凝るといふ人もやはりいない。

日本人にとっての「膝」とは、膝頭から腿^{もも}の付け根、太ももの前側全体をいったし、「肩」とは肩峰から首の辺りまでを全部ひっくるめて肩といいました。

A 日本人にとっての身体は、膝頭や肩峰のようなポイントではなく、膝のあたり、肩のあたりという「界限^{かいがい}」だったのです。

解剖学的な膝頭や肩峰という「ポイントとしての身体」に対し、「界限」に代表される「おおざっぱさ」が日本人の身体言語の基本です。

「おおざっぱ」なのは身体の話だけではありません。

子どもの頃はうちには体温計というものがありませんでした。朝、学校に行く前に「熱があるみたい」というと、母や祖母がおでこをさわり、「ああ、このくらいなら大丈夫^{だいじょうぶ}」と尻^{しり}を叩^{たた}かれ学校に追われました。怪我^{けが}をして血が出て「このくらいつばをつけておけば平気」と、いい加減な手当てをされたし、海でおぼれそうになって（小さな漁村で育ったので）やっとのことで浜辺^{はまべ}まで泳ぎ着きゲーゲー吐^はいたときだって「少し寝^ねてれば治る」と砂浜^{すなはま}に放置されました。

あまり細かいことは気にしない、これが少し前の日本人でした。

① 現代の身体に対する志向はこの逆に向かっていきます。

膝が膝頭に肩が肩峰になるというポイント化だけでなく、病名や怪我の名も細分化されていく。むかしは（少なくとも一般^{いっぽんじん}人にとっては）風邪^{かぜ}とインフルエンザの違いはなく、ただの下痢^{けり}と過敏性腸症候群^{かびんせいちょうしょうこうぐん}との違いもなかった。

B 細分化にはいいこともあります。いいことがあるどころか、たくさんあります。しかし、細分化と医学の進歩は、安易なネーミングとそのネーミングに引きずられる盲信^{もうしん}という危うさもはらみます。

数年前に「肉離れ^{にくはな}」というものを体験しました。寒い舞台^{ぶたい}の上に九十分ほど座^{すわ}っていて突然走り出したら、右ふくらはぎの上部

でプチッと音がして激痛が走ったのです。ふくらはぎが痛くて歩けない。整形外科と整復院の診断^{しんだん}はともに「肉離れ」。全治四週間などという。知人の外科医に電話で聞いても同じような答えでした。

C 、二日後には舞台があります。四週間も待てません。

D 、まずは「肉離れ」という診断名を無視することに決め、自分のからだに聞いてみた。詳しいことは省略しますが、まず塗り薬と飲み薬は使わないことにし、先生方からいわれたことも一応忘れることにしました。そして、自分のからだに尋ねつついろいろやって、結局は二日後の舞台を無事に勤めることができました。

整形外科と整復院の先生は私のふくらはぎの状況をみて「肉離れ」と診断しました。彼らの頭の中で、チェックリストがひとつひとつチェックされているさまが想像されます。それによってもっとも「正しい」と思われるネーミングをした。するとそれから先は私の足を見ることよりも「肉離れ」というネーミングに引きずられ、その結果を盲信し、「肉離れ」に対する治療^{ちりょう}だけが始められます。

いま目の前にある「その人の足」という個別的状況が忘れられてしまうのです。

これはお医者さんだけではありません。自分自身もそうです。自分のからだに尋ねるよりも、お医者さんや本にきく。自分の身体を他人に任せて、言いなりになってしまっています。

そして、こういうことに何の疑問も抱^{いだ}かないし、むしろそれが当然^{当然}だというのが現代の人の感覚です。

しかし、これは日本人にとってはかなり新しい感覚なのです。

古い日本語の「からだ」というのは **X** という意味でした。生きている身体は「み（身）」と呼ばれ、それは心と魂と一体のものでした。やがて、生きている身体が「からだ」と呼ばれるようになったことで、からだは自分自身から離れて対象化されるようになります。そうすると、自分自身との一体感が薄れるので、専門家である他人の手に委ねても平気なようになるのです。

それだけではありません。「からだ」の語源である「殻^{から}」のように、自分の周囲に強固な境界を設け、他人との壁^{かべ}を設けるようにもなります。

このような壁が強いと、能をはじめとする古典芸能のほとんどは演じることができません。古典芸能は、楽譜^{がくふ}も曖昧^{あいまい}なものだし、指揮者もない。お互いの呼吸で合わせていきます。しかも、その場その場で。

ある能楽師が、若いころ生活が苦しいので企業^{きぎょう}に勤めたそうなのです。ところが毎日乗る満員電車。目の前に女の子の顔があ

る。化粧の匂いもする。それで何にも感じなくするためには、周囲を感じるといふ感覚をシャットアウトしなければなりません。他人がいても、いないがとき精神状態が求められるのが満員電車での通勤です。

しかし、そんな生活を続けていたある日、舞台上で相手の呼吸や雰囲気を感じられなくなっていたことに気づいたそうなのです。④ それでは古典芸能はやっていけません。そこで彼は生活の苦しさは諦めて、会社を辞めることにしたそうなのです。

他人との境界が曖昧であれば、人の苦しみは我が苦しみであり、人の喜びは我が喜びとなります。また、他人とだけでなく、自然との境界も曖昧になるので、自然とも共鳴ができます。『おくのほそ道』の本で、日光の杉並木から漏れてくる日の光に感動し、人生が変わったという人の話を書きました。私たちの周りには、私たちの生きかたすらも変えてしまうほどの自然や、そして人がたくさん存在しています。

現代は、それらに対して、あるいは目をつぶり、あるいは拒否し、いよいよ「孤」の道を歩んでいくように感じます。これはとてももったいないことだと思うのです。⑤ このような現状は、明治の人たちが初めて目覚め、そして志向した「自我の確立」という方向の行き過ぎた結果なのかもしれません。

かつて中小企業診断士の資格を取るために勉強をしていたときの先生はアメリカの企業で働いていた方でした。先生は、PL法が日本に入ってくることによる影響をとて心配していました。PL法自体は悪法ではありません。しかしそれによって、他に対して懐疑的になり、より深刻な対立、屹立が生まれ、やがてクレーム社会が生まれるのではないかと危惧されていたのです。

そして、いままさにそうなっています。自分の主張は以前よりは通るようになりました。しかし、だからといって暮らしやすい社会になったかという疑問です。多くの人が「自分が正しい」、「もっとこうしろ」と自己を主張するようになった社会を、より息苦しくなったと感じる人も多いのではないのでしょうか。

(安田登『日本人の身体』による)

注 *1 PL法……製造物責任法。商品の欠陥により消費者の人身・財産に被害が生じた場合、製造者にその損害賠償責任を負わせることを定めた法律。日本では一九九五年に施行された。

*2 屹立……たかくそびえたつこと。

問1 ①「盲信」、②「懐疑的に」、③「危惧」の本文中で使われている意味として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選びなさい。

- | | | | |
|----------|--------------|-----------------|---------------|
| ① 「盲信」 | ア 機械的に信じ込むこと | イ むやみに信じ込むこと | ウ あやまって信じ込むこと |
| | エ 軽々しく信じ込むこと | オ 不合理なことを信じ込むこと | |
| ② 「懐疑的に」 | ア 厳しく接するように | イ 疑いを晴らすように | ウ 多くを期待するように |
| | エ 疑いをもつように | オ 表面的につきあうように | |
| ③ 「危惧」 | ア 心配 | イ 確信 | ウ 想像 |
| | | エ 動揺 | オ 批判 |

問2 ①から④に入る語として、最も適当なものをそれぞれ選びなさい。(同じ記号を二度以上使用しては

- | | | | | |
|---------|-------|--------|-------|--------|
| ア いけません | イ むろん | ウ ところで | エ しかし | オ すなわち |
|---------|-------|--------|-------|--------|

問3 ①Xに当てはまる適当なことを漢字二字で答えなさい。

問4 ①「現代の身体に関する志向」とありますが、その説明として、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 心と一体のものとして考えられていた身体を部分に切り分けてとらえて、客観的に認識しようとしている。

イ 薬品などの異物を体内に入れることを避けることによって、身体 of 自然治癒力を上げていこうとしている。

ウ 他者の身体については知識に基づいて考えるが、自分の身体については自らの意志を尊重しようとしている。

エ 医学の発展によって喪失してしまった、個々の身体という個性をなんとか回復させていこうとしている。

オ 身体を細かく分析しすぎた反省から、自分の身体との対話を重視し、おおざっぱさを取り戻そうとしている。

問5 ——— ②「それが当然だ」と思うのはどうしてですか。その理由を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 身体を把握するにはネーミングという方法が有効だと思い込み、他人の客観的な判断に任せるよりも、自分の判断で主観的に名付けるのが的確だと考えているから。

イ 身体をその語源である「殻」のように中身のないものだと思ひなしたせいで、自分の身体のことを把握できず、他人の判断に委ねるしかないと考えているから。

ウ 身体を自身の存在から切り離れた結果、自分と同一だという感覚が希薄になり、自分の感覚よりも専門家の診断や専門的な知識の方が的確だと考えているから。

エ 身体をおおざっぱに認識するよりも、解剖学の見地から診断する方が正確だと信じているせいで、専門家である医者^{いしや}の判断を仰ぐ方が正しいと考えているから。

オ 身体を生きるとみなさず、満員電車で身体^{からだ}の感覚をシャットアウトする生活を送っているために、身体から発せられる感覚を感じられないと考えているから。

問6 ——— ③「生きている身体が『からだ』と呼ばれるようになった」ことによって、どうなったと筆者は考えていますか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 生きている身体に関して、殻^かが語源である「からだ」という語で表現することは、周囲の人との間に境界を作ってしまうため、間接的に伝統芸能の衰退^{すいたい}を招くことになった。

イ 身体について精神面など内面の要素を含まない呼称を用いた結果、独立した確固たる存在としての身体が意識されるようになり、自我の確立という目標が達成されることとなった。

ウ 個人の身体は当人の意志によって管理されるものであったが、医療の進歩とともに他者の判断に委ねるものとなり、周囲の人との壁が取り払われる状況^{じきょう}を出現させることになった。

エ 精神的な面を含んだ身体と、生命のない身体は別物として扱われていたが、その区別がなくなることによって生きている身体も一つの対象物として考えられるようになった。

オ 自分の身体を「からだ」と呼ぶことによって個人というものを強く意識すると同時に、個人として周囲の人の役に立つとする心が芽生え、他者と共感できるようになった。

問7

——④「それでは古典芸能はやっていけません」とありますが、古典芸能をやっていくには何が必要ですか。その内容を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 人間の世界だけを相手にするという生き方を改めて、美しい自然と共鳴できるように、自然と人間の間にある強固な壁を取り払うこと。

イ 時と場合に応じて相手の呼吸や場の雰囲気を感じ取って、他人に合わせられるように普段から自他の境界を曖昧にしておくこと。

ウ 他人の感情と自分の感情とをしっかりと区別した上で役柄を演じられるよう、日常から身体と心との一体感を切り離して暮らすようにすること。

エ 日本の伝統が息づいている古典の世界を再現するために、明治の人間が確立した自我をあえて曖昧なままにとどめ、他者との壁をなくすこと。

オ 能という伝統芸能が死者や自然を題材としているため、人間以外のものでも演じられるように、自らの身体を一つの物質として扱うこと。

問8

——⑤「このような現状」の内容を六十字以内で説明しなさい。

問9

——⑥「PL法が日本に入ってくることによる影響をとて心配していました」とありますが、どのような心配をしていたのですか。その説明として、最も適当なものを選びなさい。

ア 個人が製造物に関する責任を背負うことになり、責任を抱えきれなくなった人が精神的に疲れ果ててしまうこと。

イ 製造物に関して責任を負うことを負担に感じる企業が製造に慎重になり、日本の経済の発展が止まってしまうこと。

ウ 製造物に関する責任が厳密になることで、企業同士がお互いの欠点を指摘し合うような泥仕合に終始してしまうこと。

エ 個人の権利を重視するアメリカの法律を導入することで、同盟国であるアメリカとの間に争いを生んでしまうこと。

オ 個人が自分の非を省みず他人に責任を求めるようになり、互いが自己を優先する窮屈な社会になってしまうこと。

問10

この文章の論の展開に関する説明として、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 身体の「膝」や「肩」に注目することで、部分の集合体である身体とは異なる「み（身）」の重要性を明らかにして、自他の間に壁を設けることの危うさを指摘している。

イ 身体に関する言葉を取り上げながら、日本人の身体観の変遷を段階的に説き明かし、自我を優先する近代の身体感覚を批判して、他者を思いやることの重要性を指摘している。

ウ 医者という職業から見た時の身体観と、古典芸能に関わる能楽師としての身体観を比較して、近代的な身体感覚と日本の伝統的な身体感覚を対比して違いを指摘している。

エ 明治以来の自我の確立の問題点を批判するため、日本の伝統的な身体感覚の優位性を具体的に論じ、知識だけに頼らない日本独自の身体感覚の素晴らしさを指摘している。

オ 日本人が昔から行っていたおおざっぱな身体認識を提示して、からだの語源を紹介しながら身体感覚へと話をひろげ、他者との境界が明瞭になったことの弊害を指摘している。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

土曜日の街中は、賑やかだった。小さな子どもの手を引いた家族連れもいた。鳥居は行きかう人々の顔や身なりを盗み見ながら、彼らはどういう仕事をしているのかと想像せずにはいられなかった。

ハローワークプラザの雰囲気は、思ったよりも明るく、感じが良かった。目が合った中年の女性職員は、鳥居に笑いかけてくれた。

「こんにちは」

鳥居の挙動から察したのだろう、彼女はさらに親切にこう言った。「こちらは初めてのご利用ですか？ よろしかったらご説明しましょうか」

求職登録をしているかどうかを、彼女はまず尋ねた。していないと答えると、タッチパネル式のパソコンがあるスペースに連れて行かれた。

「それでは、三十二番のパソコンをご利用ください。気になった求人がありましたら、あちらのスペースでご相談を受け付けております。ご相談ご希望の際は、あそこの端末で番号のカードを取ってください」

鳥居はまた希望職種や年齢を、エンピツの芯のような細い棒で画面にタッチし、求人を呼びだした。昨晚チェックしたものと、あまり変わらなかった。鳥居はさりげなく周囲を見回した。訪れている求職者の年齢層は、幅広くかった。鳥居と同じく五十歳という区切りを越えていそうなものも、逆に新卒とさして変わらぬ若者もいた。若者らは中年層に比べて、どこかしら余裕があるように見えた。鳥居はためにしに画面を戻し、年齢層を二十代に変えてみた。求人件数は三倍以上に増えた。

営業系の求人を三社印刷し、相談窓口で順番を待つ。

番号を呼ばれたカウンター席へ行くと、両隣はどちらも三十歳前後の男性だった。

相談窓口の職員は名刺をくれた。鳥居は彼の名前より、年齢が気になった。三十代前半か、半ばに見えた。

履歴書を持ってきているかと問われ、今日はとりあえず自分の年代の再就職状況について教えてほしいと答える。

「実は今週……」

リストラをほのめかされたと言いかけて、鳥居は口ごもった。ハローワークの職員をやっているのだから、彼は公務員だろう。民間会社に比べれば圧倒的に安定している、リストラなどとは無縁の世界に身を置く彼への羨望が、鳥居の舌を鈍らせた。

「そうですね。確かに年齢が高くなると、正直難しくなる部分はあるのですが、経験という点で補える場合もありますから」

職員はあくまでにこやかだった。「今までどんな仕事をされてきたんですか？ お持ちの資格とかがありましたら……」

普通運転免許くらいしか思い浮かばなかった。

と、隣の会話が耳に入った。

「宅建と中小企業診断士を持っています。あと介護職員初任者研修も。資格は持っていませんが、パソコンなら普通にパワーポイントまで使えます」

逆側からも聞こえた。

「簿記一級があります。税理士も三科目合格しています。簿記論と財務諸表論、所得税法です」

鳥居の口はいよいよ重くなった。職員が怪訝な顔をした。

結局鳥居は、自分にとって有益な情報を得られずに、ハローワークをあとにした。

昼の森は、小学生以来だった。

日が落ちたあとの時間帯は青年しか見なかったが、昼間は、しかも土曜ならば別かもしれないという予想は、あっさり外れた。南の鉄扉から中に入れば、やはり人の気配のない森だ。

踏みならされた細道を、ミズナラに向かって進むが、ふと、枝に縄をくくりつけるおのれを想像してしまい、足取りが鈍る。

リストラされたあとは、どうやって生きていけばいいのか。家族の生活がある。翔太の学費がある。ローンもまだ残っている。

今まで見聞きしてきた暗いニュースが頭をめぐった。

ハローワークの職員は、年齢のデメリットを経験で補える場合があると言ったが、これといって特別な仕事もせずに今まで過ごしてしまった自分には当てはまらない。

両隣の若者のように、自らを売り込める何らかのスキルがあれば、再就職など恐れるに足らないのか。いや、そもそもそんなものがあれば、リストラ候補のリストラには入らないだろう。

不況になってからというもの、大学在学中から資格を取得したり、留学経験があるなど、優秀な人間の入社が増えてはいた。今は巷にそういう若者がいっぱいいるのだ。

老いた、丸腰の五十男が出る幕は、もうない。今から取得したらどうかという言葉も、人事課の二人は笑った。鳥居さんが？

と。

固くしまった雪を踏みしめ、森を歩く。少し風が流れるように吹いて、木々の枝にかかっていた粉雪を散らした。日光に照らされた雪は、黄金色に輝きながらしばし宙を舞い、やがて森の奥に降り注いだ。

ため息が出た。

ミズナラの前に辿りつき、見上げる。

自分だけの秘密基地がほしかったのだった。

あところに戻れたら、どんなに。

「リストラされるんだよ」

近づいてきた背後の気配が、間拔けなテノールでのんきな挨拶を投げかけてくる前に、鳥居は先手を打った。「今日はハローワークに行ってきた。だが、収穫はなかった」

ベンチコートの布地がこすれ合う音がする。長身の青年が困り顔でもじもじしているさまを、鳥居は容易に想像できた。

「今度生まれ変わるなら、木だな。年を経て、生長すればするだけ高みに行きつき、光を余計に浴びられる。人間はそうはいかない……若いころに怠けたのが悪いと言われれば返す言葉がないが、大事なことっていうのは、そのときにはわからないものだ。そして、わかったときには、もうどうにもならない」

⑤「おずおずとしたテノールが、様子を探ってくる。「あの……」

「惨めだろう？ 若い連中から見たらこんなオヤジは。この期に及んでせつせと仕事のためになるような勉強をしても、所詮悪あがきだ。第一、頭に入りやしない。結局、若いときだけなんだよ、大事なものは……。こうなってはもう、なにもかも遅い」

「あの」

青年の語気が、少し強くなった。鳥居は風ではらはらと落ち、頭に降りかかる雪を、手袋の手で払い落とした。

「あなたにコーヒーガムをあげたという人ですけれど」

鳥居は振り向いた。青年の頭やベンチコートにも粉雪がついて、ところどころ木々をすり抜けてくる光に照らされ、星みたいに瞬いていた。

「私にこの仕事を教えてくれた人なんですけれど、彼は今、イギリスにいます」

「え？」

①「一瞬、耳を疑った。青年の言葉が突拍子もなかったというのもあるし、あの優しい男がまだ生きていたら、今何歳だろうと純粹に疑問に思ったのだ。」

④「昨年十二月から、留学したんです。自然と庭園の調和についてもっと学びたいと言って」

鳥居の口がおのずと半開きになる。「……留学？」

「はい。私にここを全部任せて。そんな、何年もじゃなくて、一年四季を見たら帰ってくる予定ですけど」

「あの人は……いくつなんだ？」

「私も正確には知りませんが、七十くらいだと思います」

「それで、イギリスに？ 知り合いとかがそっちにいるのか？」

「コッツウォルズに友人がいるのです」

「英語は？」

⑤「青年は少し頬を緩ませた。「私のほうが話せます。彼はせいぜい日常会話程度くらいじゃないかと」

「それで留学に？ 自然や庭園って……専門用語があるだろうに」

「そうですね」

青年はちらりと空を仰いだ。「でも帰ってきたら、私よりきっとペラペラになっているでしょう」

それからベンチコートの彼は、鳥居に目を戻して、今度ははっきりと笑った。

「私も驚いたんです。いきなり留学だなんて。しかももう、いいお爺さんなのに。でもあの人は全然迷っていませんでした。あの、あなたがいつも見ているそのミズナラですけれど」

急に話が逸れたようで、鳥居は若干混乱する。「ミズナラがどうした？」

「子どものころのあなたが見ていたときよりも、大きくなりましたよね」

鳥居は頷いた。「そりゃそうだろう」

「最近になってあなたがここをまた訪れてくれるようになってから今日までも、はっきりわかるほどじゃなくても生長しているはずですよ」

「そりゃ、日数が経てばな」

「極端なことを言えば、今こうして話している間にも、ミクロの単位で変化しています」

「ああ」

鳥居は唇を曲げた。冬に木が大きくなるイメージはまったくなかったが、植物とて生きている以上、刻一刻と変わっていくのは事実だ。それは に当てはまることだろう。

ただ、一般常識的には――。

「君は人間もそうだと言いたいのか？ 違う。人間はそれを老いると言うんだ。植物とは一緒にならん」

やはり若いものにはわからないのだ。この変な声の青年は、まだまだ人生経験が足りない。日々枯れ、衰え、過去にできていたことができなくなり、開けていた視界が狭まっていく加齢の残酷さを、実感していない。鳥居は叱りつけるように青年を睨んだ。

ところが青年は、「同じですよ」と言い返した。

「植物だって永遠には生きません。いつかは枯れて朽ち倒れ、若い木々の養分になる日が来ます。それを老いと言うのならば、植物だって同じなのです。時間はすべてに平等なのですから」

「君はなにが言いたいんだ」

「あの、留学に行くときあの人は、こんなことを口にしていました」

青年は一途な表情になっていた。「時を止めることなど誰にもできない。だから、なにをするにも、今が一番人生で若いときだ、って。自分を成長させるチャンスの前に、無理かどうか考えるだけ時間の無駄だと」

そう言って、今が一番若いからと言って、海を渡っていったんです、いいお爺さんなのに――
⑦ 青年は教壇の前でなにかを発表する子どものように、一生懸命言い募った。

「あなたもそうです。この期に及んでとか、なにもかも遅いと思ったとしても、それでも、これからのあなたの人生で、今が一番若いあなたなんです」

青年のベンチコートを、きらめく粉雪の粒がかすめた。

(乾ルカ『森に願いを』による)

問1 ~~~~~ ④「巷」、⑤「おずおずとした」、⑥「突拍子もなかった」の本文中で使われている意味として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選びなさい。

- | | | | | | |
|--------------|-------------|---------------|------------|------|-------|
| ④ 「巷」 | ア 海外 | イ 大学 | ウ 会社 | エ 世界 | オ 世の中 |
| ⑤ 「おずおずとした」 | ア 怒っているような | イ ためらっているような | ウ 申し訳なさそうな | | |
| | エ 少し恥ずかしそうな | オ 何も考えていないような | | | |
| ⑥ 「突拍子もなかった」 | ア 度はずれだった | イ 突然で急すぎた | ウ 期待はずれだった | | |
| | エ いい加減すぎた | オ 考えつかなかった | | | |

問2 に入る語句として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| ア 喜怒哀楽 | イ 適材適所 | ウ 日進月歩 | エ 森羅万象 | オ 花鳥風月 |
|--------|--------|--------|--------|--------|

問3 ―― ①「若者らは中年層に比べて、どこかしら余裕があるように見えた」とありますが、鳥居がそう感じたのはどうしてですか。その説明として、最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 中年層のように、養う必要のある家族を抱えている者が多いわけではなく、まだ親に養ってもらっている者も多いから。
- イ 中年層と違って、若者たちは皆自分を売り込むだけの材料をたくさん持っており、就きたい職業を選ぶことができるから。
- ウ 中年層はハローワークに来ることを否定的なこととしか考えられないが、若者たちは肯定的なことととらえているから。
- エ 中年層よりも若者を求める企業が多い傾向にあるだけでなく、就職のための準備を早い時期から始めている者が多いから。
- オ 中年層と若者の求人件数を比べてみると実際はそれほど変わりはないが、その事実を知っている者がほとんどいないから。

問4 ——— ②「鳥居は口ごもった」とありますが、その理由を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 自分よりも若くて人生経験も少ないハローワークの職員に、リストラを告知されるかもしれないという自分の現状を話したところで、他人事のように扱われるだろうと思えたから。

イ 自分より若いのに、はるかに安定していると思われる職員の立場をうらやましく感じ、共感を得られないだろうと考えると、自分の現状をさらけ出すことが一層惨めに感じられたから。

ウ 両隣にいる三十歳前後の男性達が立派な資格や経歴を述べているのを聞いていると、これといった資格を取ることもしせず歳を重ねてきた自分のことが情けなく思えてきたから。

エ ハローワークの職員という公務員を目の前にして、自分がリストラされるような目に遭うのは政治がしっかりしていなかったせいであると考え、世の中に対して腹が立ってきたから。

オ 民間の会社と比べると非常に安定しているであろう公務員という立場をうらやましく感じ、自分もどうすればそういった立場を手に入れられるだろうと考え込んでしまったから。

問5 ——— ③「こんなオヤジ」の内容を具体的に表現した部分を、——— ③より前の部分から十字でぬき出しなさい。

問6 ——— ④「鳥居の口がおのずと半開きになる」とありますが、その理由を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 既に立派に出来上がっているように見えるこの庭園を、より一層素晴らしくしようという心意気に胸を打たれたから。

イ この庭園の経営が、古い先の短い老人の留学に頼らざるを得ないほど切迫していると知り、あきれてしまったから。

ウ 自分よりもはるかに年老いた老人が今更留学すると聞いて、一瞬その意味を理解しがたい程の驚きにとらわれたから。

エ 学習するという名目で海外に渡って、悠々自適に老後を過ごしている老人の近況を聞いて、うらやましく感じたから。

オ たった一年のイギリス留学では、自然と庭園の調和という難しい課題に結論が出せないかもしれないと心配したから。

問7 ——— ⑤「青年は少し頬を緩ませた」とありますが、その理由を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 自分のことだけ話していた鳥居が、次第に老人の話に耳を傾けてくれるようになってうれしくなったから。

イ イギリスに行った老人の話に対して、質問を何度もくり返してくる鳥居の態度におかしさを感じたから。

ウ 鳥居と老人の考え方がまるで違うのに、話し方だけは皮肉にもどことなく似ていることに気づいたから。

エ 留学しようとイギリスに行った老人よりも、自分の方が英語を上手く話せるので、誇らしく思ったから。

オ 年齢や語学力といった問題をものともせず、目標に向かってひたむきに行動する老人の姿を思い出したから。

問8 ——— ⑥「あの人は全然迷っていませんでした。」とありますが、「あの人」が迷わなかったのはどのような考えを持っていたからですか。六十字以内で答えなさい。

問9 ——— ⑦「青年は教壇の前でなにかを発表する子どものように、一生懸命言い募った」とありますが、このときの青年の様子を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 人前で演説でもするかのように論理的な語り口で、自分の信じる生き方を、鳥居に何とか伝えようとしている。

イ 言葉足らずな話し方だが、なりふり構わず木々の世話を通じて学んだ考え方を、鳥居に何とか伝えようとしている。

ウ うまく表現できないけれど、自分が感じ取ったものを高揚した思いのまま鳥居に何とか伝えようとしている。

エ 幼稚にだだをこねるかのように必死に訴えて、若い自分なりに考えた意見を、鳥居に何とか伝えようとしている。

オ 辛抱強く教え諭すように、使命感をもって、老人が示してくれた生き様を鳥居に何とか伝えようとしている。

問10 「木」と「人間」に関する考え方について、A 鳥居の考え方、B 青年の考え方として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選びなさい。

- ア 木も人間も年を経たところできして変化するものではなく、生きとし生けるものは全て無常の存在である。
 イ 木も人間も年を経た分だけ経験を蓄積するものであり、過ぎた時間に無駄なものはないはずである。
 ウ 木も人間も年を経るほどに変化するものであり、それを成長ととらえるか衰えととらえるかは本人次第である。
 エ 木は年を経るほどにより高い場所まで伸びていくのに対し、人間は老いると腰が丸まり地べたに近づいてしまう。
 オ 木は年を経るほどに変化していくものであるのに対し、老いを受け入れた人間は変化の機会を逃してしまふ。
 カ 木は年を経るほどに生長し立派になるのに対し、人間は若い間に努力をせねば年を経て老い衰えるばかりである。

問11 本文の鑑賞文として、最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 作品全体を通して、若者と中年を対比し、冷たい雪の描写を多用して両者の間に埋められない溝があると暗示している。
 イ 無機質で機械的なハローワークの様子と、みずみずしく育ったミズナラを対置して、鳥居の心情の変化と呼応させている。
 ウ 雄大な木々を描写することで、鳥居のように思い悩むより、老いてなお人生を楽しむべきだという主題が示されている。
 エ 粉雪を払い落とす鳥居と無意識に受け入れている青年の姿を描き、両者の人生の受け止め方を間接的に表現している。
 オ 雪は若者の純粋な心を表しているが、鳥居からうかがわれるように、老いの過程で消え去るはかないものを示唆している。

三 次の文章を読んで、(①) から (⑤) に入る最も適当な語をそれぞれ選びなさい。

叩かれて昼の蚊を吐く木魚かな

この俳句は、『坊ちゃん』『我が輩は猫である』などで知られる (①) が、正岡子規に添削の依頼をしたものと言われている。俳句には季語を入れて作らなければなりません。この場合、季語は「蚊」で季節は (②) です。つい先ほどまで木魚の中で羽を休めていた蚊が (③) 様子を、木魚が「蚊を吐く」という (④) のような表現をしているところがこの句の醍醐味です。けだるい日常から、暑さを忘れるような (⑤) が切り取られています。

- | | | | | |
|-----------------|--------------|-----------------|---------------|-------------|
| ① ア 森鷗外 | イ 夏目漱石 | ウ 樋口一葉 | エ 太宰治 | オ 芥川龍之介 |
| ② ア 春 | イ 夏 | ウ 秋 | エ 冬 | オ 新年 |
| ③ ア 飽きて移動しようとする | イ 驚いて飛び出していく | オ 弱って速やかに行動できない | ウ 攻撃されて警戒している | ウ そのまま休み続ける |
| ④ ア 枕詞 | イ 体言止め | ウ 倒置法 | エ 直喩 | オ 擬人法 |
| ⑤ ア 冷たさ | イ さみしさ | ウ おかしさ | エ 楽しさ | オ つまらなさ |

四

次の語句の意味として、ふさわしいものをそれぞれの語群から選びなさい。

- ① ハーモニー ② クラシック ③ スローガン ④ モラル ⑤ アセスメント

語群

ア 音楽 イ 標語 ウ 道徳 エ 素人^{しろうと} オ 古典 カ 程度 ク 調和 ケ 評価

五

次の のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 単純メイカイな理論。
② 事情に応じてゼンシヨする。
③ アンチヨクな手法で失敗する。
④ 中国のコジから作られた言葉。
⑤ 過去の事例からルイスイする。
⑥ 御タコウをお祈り申し上げます。
⑦ セイチに巡礼^{じゆんれい}する。
⑧ フウキ委員に立候補する。
⑨ 批判をイツコウに気にしない。
⑩ ヨダンを許さない状況^{じようきよう}。

